

## リス「シマリス」

「北国の動物たち」によると第一次世界大戦たけなわなころ、ササゲマメが盛んに輸出され、高値をよんだ。ここで大量生産すれば一獲千金も可能だ、野心満々、マメ成金を夢みた北海道の開拓民たちは数十戸が連合して後方羊蹄山麓<sup>しりべし</sup>の真狩原野に入植した。北海道拓殖銀行から資金を借り、まづ一年間耕してみると結果は大成功だった、成金は目の前だ、二年目さらに資金を投じて大規模に種をまいた。

不幸にしてそれは大正七年第一次大戦の終わる年だった。せつかくの秋の収穫が終わつたとたん、十一月の終戦をむかえ、ササゲマメ相場は一挙に暴落した。

数十戸の入植者たちは銀行の借金も返せなくなり、次々と夜逃げをはじめた、あくる年の春にはついに五、六戸を残すだけになつた、これだけ少なくなつてしまうと、生産過剰も起らず、市価も一応底をつく、ともかく残つた数戸の入植者たちは生きるためにまた種をまいた。

ササゲがみのりははじめころ、意外なことが起こつた、マメ畑にシマリスの大群が押しよせたのだ、みるみるうちに荒らされてゆく、放つておいたら収穫皆無になるので、あわてて刈りとつたが、すでに半分以下になつていた、しかしシマリスの攻撃はまだやまなかつた、この前年までは数十戸が広大な畑をもつていたから、シマリスがマメを求めて集まつても被害は知れていた、ところがこの年には前年の豊富なマメで大繁殖したシマリスがたつた数戸の畑に全部集まつたのである。

マメを刈りとられ、飢えたシマリスの大群は、農家の倉庫に押しよせた、倉庫とはいつても納屋<sup>なや</sup>みたいなものだったからすきまだらけ。倉庫の中に足をふみ入れると、マメにむらがるシマリスが、波をなして右往左往し

た、手のほどこししようもなく呆然と立ちすくむ開拓者の前でシマリスたちは、冬の貯蔵用にそれぞれの巢穴へどんどんマメを運びさつてしまった、ある農民のもらしたことが、いまでもつたえられている。

「わしらはシマリスと銀行にほろぼされたんだ」

かわいらしいシマリスが、これほどの威力をみせるのも、ひとつにはかれらが冬ごもりのために、食糧をたくわえる習性があるためだ、十月、落葉樹が裸になりはじめるころ、シマリスは原野や森林の傾斜面に、それぞれ冬ごもりの穴を掘る。木の根が入りくんだ地下に、直径二、三センチの坑道を二メートルから四メートルも掘つた後、ひろびろとした部屋をつくる。部屋は食糧の食糧用と便所用とが別々につくられ、食糧庫には十リットル（五、六升）ちかくもの木の実がせつせと運びこまれる。準備が終つて初雪がふりはじめるころ、穴の入口をふさぐ、霜柱しもぼしちは水の補給もしてくれる。

こうして冬眠にはいるがシマリスはヤマネコやコウモリのように完全に眠りつつけはしない、数日おきに目をさましては、トイレで用をたし、食糧庫で食事をとつてからまた眠る。

数日おきに食事はしていますが、冬ごもりの末期には体重が三分の一もへつてしまうとか。

シマリスが穴からでて来る季節に入ると「ホロツ　ホロツ」と笛のような恋の歌をうたいながら、かれらは枯れ木の穴や岩のさけ目に巣をつくる、キツツキの造つた穴を利用することもある、子どもは数匹、生れたときから、背中の五本のシマがはつきりしている、二ヶ月もすれば子リスの尾はふさふさしてきて、木からとびおりるときパラシューートの役に立つようになる。